

新明解 國語辭典

第三版

金田一東助 見坊泰紀

金田一春彦 柴田 武

主幹 山田忠雄

新明解 国語辞典

第三版

金田一京助 見坊豪紀

金田一春彦 柴田 武

主幹 山田忠雄

三省堂

© 1981 by Sanseido Co., Ltd.

First Edition 1972

Second Edition 1974

Third Edition 1981

Made and printed in Japan at the Sanseido Press, Tokyo

装
丁

川
上
成
夫

日本語の より良き使用の為に (第三版序)

本邦における辞書發達の歴史を顧みるに、平安朝期における『篆隸万象名義』テンレイバンシヤクナミウウジと言ひ、幕末・明初における対訳辞書と言ひ、どれを取つて見ても、海彼・舶來の諸辞書の翻訳・翻案から出發した事は紛れも無い事實である。このような事情に起因し、創始期においては、この国の辞書に必ずしも 創意 は求められなかつた。これが猶 尾を曳いて今日の辞書界を毒している事實は蔽うべくも無い。辞書における摸倣・追隨が 小説におけるよりも 論文におけるよりも甚しい事は、識者全ての認める所。

辞書が、文字習得・確認の爲という より低い目的を超え 言語内省の爲の鑑の域にまで進み、以てより高い社会的評価を克ち得る爲には何程かの創意を持つことが必要であらう。

旧『明解國語辭典』は、新語を多数含む豊富な見出しを収めると共に二行主義の明解な語釈の徹底にこれを求め、読書界に空前の滲透を見た。『新明解國語辭典』は、見出し語の安易な多収を避け、寧ろ語釈の、真の意味における充實を専ら心掛け、斯界における革命を圖つた。その相違は、主幹の好みに基づくと言ふよりは、畢竟 時代の要請に帰すべく、又 大所高処に立つて判断するならば、小型辞書は一般に、このような二大方針の相克・揚棄の上に進展するものと目される。

單なる文字の説明や言換えの若干の提示に終始する古い型の辞書も今日少なからず見受けるが、辞書本来の用途が 語の用法 についての指示に在ることを考える時、この国の辞書は 語結合の型 を示す点において、歐米の辞書に著しく劣る事實は遺憾ながら認めざるを得ない。

抑々 語結合の型 とは、言語使用上 最も必要な 体言と用言との対応の型（一部は 主・述 の照応をも兼ね、また当然、被修飾語と修飾語との限られた結びつきの型をも意味する）に他ならぬ。

誰しも 自分の子供の成育時に観察する如く、幼児が最初に習得し使用するのは 単語文 であり、次の段階では 助辞 が加わる。文節を累ねて短文を成すのは稍々長じてからの事である。言葉が自由に操れるということは、一定の単語と共に何をいれれば可いか、何をいいるとおかしいかの結合の選択に就いて十分な知識が有り、また同時にその選択を実践することが出来る能力を指す。

辞書は元来そのような 型の選択 に関する能力を涵養し 培う為の枢要な器であるにかかわらず、かかる記述が等閑に付されて久しいものがある。

右の通弊に鑑み、主幹は、その補充(a)を今次の改訂作業における第一方針と致し、併せて誤植・誤記の完全なる除去と語釈(b)の充実に努めた。aは今回初めて実施する所であるが、bは初版終了時より夙に始まり今日に及び、また次版刊行の時まで一日も休まず続けられるであらう。

利用者諸賢の旧に倍する愛顧と熱い支援とを冀うと共に、忌憚無き批判を待つこと切。

第三版が現在の規模において成るについては 一に、共著者からの助言及び 次の九氏から寄せられた数多くの意見に依ること言うまでも無いが、その悉くは今回活かし切れなかつた。

酒井憲二・若杉哲男・倉持保男・阪田雪子・鈴木真喜男・遠藤和夫・長尾 勇・山田 潔・小笠原 一
猶、今回も担当者 三上幸子君の惜しみ無き献身を得たことを特記する。

昭和五十五年十二月

山田 忠雄

編集方針

この辞典は現代の言語生活において最も普通に用いられる日本語に就いて、その多岐にわたる用法を種種の角度から内省・確認し、併せて正確・効果的な使用が可能であることを念じて編集された。

執筆に当たっては次の諸点を基本方針とした、

見出し語

- 一 採録方針 いわゆる自明合成語・擬音語は多く省略に従った。また、動詞とその名詞形との間に大きな用法の違いの無いものや、形容詞およびいわゆる形容動詞に基づく派生形(—さ・—げ・—がる)も、語釈の末尾に太字で示すのみにとどめ、別掲しなかった。

- 二 表記 「常用漢字表」「現代かなづかい」および「外来語表記の基準」に従った。

- 三 重要語 三千四百三十九に**の印を付けた(♡あとがき一二八三ページ)。

- 四 漢語の造語成分 (♡本文六六二ページ)。当該ページの上方一隅に枠で囲み別掲した。この場合のハ漢語Vは、字音語の謂ひである。

- 五 固有名詞 国名はそのすべてを巻末に付載した。

語釈 単なる文字の説明および堂堂めぐりを極力排し、文の形による語義の解明を大方針とした。

- 一 語義の分類 無意義な細分化を避け、大分類に従った。文脈に即しての意味は、用例の下のパラフレーズによって示した。

- 二 語義の配列 語義は、現代日本語において通常使用されているものを凝視し、頻度の高いものから低いものへ、一般的なものから特殊なものへという方向によることを原則とした。古義・原義で、あとへ回すことに忍びないものは、語原として冒頭に注した。

- 三 類義語の弁別 漢語的表現・古語的表現・老人語・雅語的表現・和語的表現・字音語的表現 などの術語のもとに同義語間の用法の相違を記述した。

右の術語中におけるハ漢語Vは、狭義における用法に属し、字音語一般とは区別されるものを指す。

- 四 補足的説明 語釈に先立って、語原・位相を示すと共に、語の使用場面などに就いての限定を知らせることに努めた。外来語のスペリングも語原扱いとした。原語の意味を注記したのもも少なくない。

例、サイダー①〔carbonic酒〕：

本義と異なる広義・狭義の用法および転義並びに必要な補足的説明を語釈の末尾に施した。

- 付 録 巻末に、外国地名一覧・文法関係諸表のほか、国民の祝日を中心とする生活暦・二十四気および計量単位また、アクセント一覧を付載して、利用の便を図った。

細則

見出しの表記と体裁

- 1 和語・字音語はひらがな、外来語はカタカナで示した(ただし、慣用久しきに及ぶ約十語は準和語扱いとした)。また、和語であっても慣用の有る向きはカタカナ書きに従った。

- 2 あいきどろ①合気道・ねがわくほにおける右傍のカタカナ小字は、表記と一致しない発音を示す。

- 3 見出しの区分は原則として二区分とした。助詞「の・つ」を介するものは助詞までを上位に扱った。また、促音・N音が新たに添加される口語形は、促音・N音から以下を低位として扱い、本来の変化形と区別した。

例、そっけ〔素気〕　ぞっけ〔俗気〕

あばれんぼう〔暴れん坊〕　のんべえ〔飲兵衛〕

なお、区分は、現代の言語意識に即して行い、必ずしも語原にまではさかのぼらない。起原における区分は、語原欄に注した。

4 二字の漢字で表わされる見出しでも、動植物名・固有名詞および借字によるもの（仏教語の音訳や万葉がなによる固名の表記を含む）は区分を設けなかったものが多い。

5 活用語は原則として終止形で掲げ、語幹と語尾に分けられるものは、その間に・を入れた。

見出しの配列

6 五十音順による。同一のなかの中では、清音・濁音・半濁音、また促音・拗音・直音の順序に従った。

7 1 をもって表わす外来語の長音は、その場合の発音がア・イ・ウ・エ・オのいずれであるかによって、それぞれの音を表わすかなに置きかえた位置に配列した。

8 同音語のオーダーは次の順位で配列を正した、

(1) 記号→造語成分→接辞（接頭語・接尾語）→単純語→複合語〔語の性質・構成〕

(2) カナ→漢字〔表記〕

(3) 外来語→字音語〔内部を上の漢字で読ませ、さらに画数順、同画数のものは、康熙字典の順、右に見えない字は、同画数の最初〕
↓和語〔語の種類〕

(4) 助詞→助動詞→感動詞→接統詞→副詞→連体詞→用言（動詞・形容詞）
↓名詞（代名詞はその直前）〔品詞の区分〕

(5) ハイシヤ　南医者→拝謝・配車・敗者

カ・エル（代える・変える）↓カエ・ル（戻る・返る・帰る）
のように、上位の音節数の少ないものから多いものへと配列した。〔同一品詞に属する同音節数の語の区分〕

9 なんらかの意味で対比される同音語、および語原の異なる同形の外来語を便宜〔二〕で統合し、スペースの節約を図った。

子見出し

10 同根を統合する範囲は、外来語（梵語の音訳を除く）はすべての場合にわたり、字音語は複合語見出しに限り、また、和語は三音節以上に限る。

11 複合語や慣用句・ことわざの類における共通部分は——で略示した〔活用語の場合は、語幹までを〕。

12 非共通部分はかな見出しを用いず、ただちに正書法を示し、その下にアクセントを掲げなかつた。アクセントの上の小書きひらがなは訓〔三〕みを示し、直下のカタカナは歴史的かなづかいを示す。

アクセントの指示

13 単語として独立の用法を持つすべての見出し語に就いてアクセントを示した。見出しの直下、○で囲んで示したアラビア数字がアクセント記号である（付録「アクセント一覧およびその手引き」）。

14 単独の見出しを掲げなかつた語のアクセントは、言替えなどをしたその所において示すことを宗とした。

歴史的かなづかいの指示

15 アクセントに続けて、小字・カタカナで歴史的かなづかいを示した。複合語の場合は区分に従って二行に割り、当該部分だけのカナを示して他は——で省記した。

例、あいたの^①間^②　あいち^③ょう^④の^⑤長調^⑥

見出し語の正書法

16 「——」の中にその語の「正書法」を示した（ただし、かな表記を普通とするものは省略）。ここで言う「正書法」とは、漢字かな交じり文中における漢字を主体とする表記の、最も標準的な書き表わし方として一般に行われるものを指す。

17 表記が二つ以上有る場合は、正書法欄に掲げないものを、語釈の末尾に古来の慣用・昔の用字・代用漢字などの別を示しながら掲げた。

18 ローマ字で書くことが普通であるものも、この欄に示した。

例、アイエルオー[ILO]

19 学習漢字は教科書体活字によって示し、常用漢字表外の字には(を、常用漢字表に有っても本表に無い訓③)みの場合には(を付けた。(も(も、直下の一字にだけ適用される。二字以上同じことを示す場合は(一)一)で包んだ。

品詞などの指示

20 「一」の直下に(かな表記のものを見出し、またはアクセントの直下に、名詞以外の品詞名を(一)に包んで示した。

21 品詞以外で(一)を用いたものは次のごとくである、

(造語) 造語成分〔号本文六六二ページ〕

(接尾) 接尾語

(接頭) 接頭語

(略) 略語

〔参考〕本辞書では、連語という術語は一切用いなかった。

22 名詞・副詞のうち、サ変動詞またはいわゆる形容動詞としての用法を併せ有するものは次のごとく扱った、

名詞のほかにサ変動詞の用法

名詞のほかに連体形に「な」、連用形に「に」の用法

右のうち、一般には連体形の用法だけのもの

名詞のほかに連体形に「たる」、連用形に「と」の用法

右のうち、一般には連用形の用法だけのもの

名詞のほかにタルト活用形容動詞とサ変動詞の用法

名詞のほかにタルト活用形容動詞とサ変動詞の用法

ただし、右の用法は雅馴(まこと)と認められるものに限る、網羅を宗とはしなかった。

23 動詞は活用の種類と自他の区別を示した。ただし、日本語の動詞の自他に就いては問題も多いため、サ変動詞のうち22に関するものは一切しるさなかつた。補助動詞は「て」「で」を介するものだけに限り、他は「接尾語的に」などの注記の形で示した、

例、あう〔自丑〕…〔接尾語的に〕…

24 助詞は、格助詞・副助詞・接統助詞・終助詞の四種に分けた。位相などの指示

25 次の四種のほかは、「野球で」「すもうで」「仏教で」「数学で」のごとく具体的に示した、

〔雅〕雅語。日常のくだけた会話や文章には常用されず、短歌・俳句などの詩的表現や文語文に多く用いられるヤマトコトバ。

〔古〕古語。漢文訓読系統の古風な文章語としてしか用いられないものや、江戸時代までは日常語として行われた字音語など。

〔俗〕俗語。内輪の間柄・親しい関係にある相手との間に行われる、ごく普通の話し言葉。やや崩れた形を含み、いわば、口語中の最右翼とでも言うべきもの。

〔方〕方言・俚(り)語。

語釈の表記

26 常用漢字をフルに使い、かつ独自の方針で表記を統一した、

例 (一) 哺(⑤)乳類などをルビ無しで頻繁に用いた。

(二) 文中における動植物名は多くカタカナ書きにした。

(三) 外字および難読字には(一)内に、カタカナを用い二行で訓みを示した。

27 用例の中、結合が局限されるものは、一一注記する代りに必要部分を太字で示した、

例、じまい「見ず」 かまう「行つても構わない」

かつて「未だ」無かった経験

以上は、常に否定表現を伴うことを示す。

いる 目「見て一人・笑つて一写真」

28 「常用漢字表」の音訓に関わらぬ訓みを持つ語、即ち熟字訓の類は、語釈の末尾に補足的に「」の形で示した。

29 「常用漢字表」の音訓およびその付表の語の取り扱いに就いて、

(1) 付表「(六ページ)」に載つていても、日本語の字順と漢字面とが一対一対応を示さないものに就いては、語釈の末尾に次のことく注記した、

あす……〔付表「明日」〕 あずき……〔付表「小豆」〕

(2) 付表所載の語例を複合語の一部に適用したり、複合語の一部分の訓みを見出しに適用したりした場合などは、その旨を注記した、

a 「青海原」……〔付表「海原」〕
b 「居士」……〔付表「一言居士」〕

c 「八百長」「八百屋」「八百(万)」……〔付表には「八百長・八百屋のみ例示」〕

(3) 匹 における ヒキ は、字音 ヒツ の和音と考えた。また、同じく 州 における ス も音と扱った。

30 取り扱いに問題のある送り仮名に就いて、

史的に見れば、送りがなは、訓みの確認のため漢字の傍らに随時小書きしたもので、一貫した理法など由来 存しない。

然しながら、規範を生命とする辞書の場合、全くの無方針を避けるとすると、結局 常識の範囲内で多く送るもの()内を表記するもの「a」と、比較的少なく送るもの()内を表記しないもの「b」と、問題の場所を語ごとに示せば用を広く弁じることが出来るのではな

いかと考えた。

(1) a が本則と一致するものは注記を施さない。

(2) b が本則と一致するものは、語釈の末尾にその旨注記する、

〔汚い〕……〔本表「汚い」〕 〔下(る)〕……〔本表「下(る)」〕
〔作(る)〕……〔本表「伴(う)」〕 〔上(明)る〕……〔本表「上(る)」〕

(3) a が通則3の例外(1)と一致する場合は、その旨注記する、

〔幸(い)〕……〔例外「幸(い)」〕 〔幸(世)〕……〔例外「幸(い)」〕

(4) 通則7に掲げられた語は、その趣旨を生かしbのみを示した、

〔合(間)〕「並木」 「巻(紙)」 「字(引)」 「振(出)」 「乗(組)員」

注意(2)に基づき、例えば「家並・町並・人並・十人並」にも「並木」と同じ方法を適用した。

(5) 複合語の上位が かな書きの場合、下位の表記は多くaに従った。

(6) 活用の有る複合語を子見出しとして掲出する場合、連濁を伴う語形が短いものは かな書きで示した。

(7) 極めて新しい成立に属する語はbを示さない。

(8) 動詞連用形に基づく名詞、いわゆる居体言(おの)の末尾は一般に()で示したが、特定少数の語彙()に限ってaのみを掲げた、

例、…押し ……過き ……歩き ……好き ……慰み ……便り

(9) 常用漢字以外を使用する見出しに就いても上記を準用した。

付 表

あす	明日	いちげんこじ	一言居士
あずき	小豆	いなか	田舎
あま	海女	いぶき	息吹
いおう	硫黄	うなばら	海原
いくじ	意気地	うば	乳母

くろうと	きょう	きょう	かわら	かわせ	かや	かな	かぜ	かし	かくら	おもや	おみき	おまわりさん	お巡りさん	おぼ	おとめ	おとな	おとうさん	おじ	おかあさん	えがお	うわつく	うわき	
玄人	果物	今日	昨日	川原	河原	為替	蚊帳	かや	飯名	風邪	河岸	神楽	母屋	母家	乙女	大人	お父さん	伯父	叔父	お母さん	笑顔	浮つく	浮気

ぞうり	すもう	すきや	しわす	しろうと	しらが	じょうず	じやうず	じやうり	しゃみせん	しみず	しぼふ	しな	しぐれ	さみだれ	さなえ	さつきばれ	さしつかえる	さじき	ざこ	さおとめ	ことし	けしき	けさ
草履	相撲	数寄屋	数寄屋	素人	白髪	上手	数珠	砂利	三味線	清水	芝生	竹刀	時雨	五月雨	早苗	五月晴れ	差し支える	棧敷	雑魚	早乙女	今年	景色	今朝

はたち	はかせ	のり	ねえさん	にいさん	なだれ	なごり	なごうど	ともだち	とけい	どきよう	とえはたえ	とあみ	てんません	てつだう	でこぼこ	つゆ	つきやま	ついたち	ちこ	たび	たなばた	たちのく	たち	だし	
二十歳	博士	祝詞	野良	姉さん	兄さん	雪崩	名残	仲人	友達	時計	読経	十重二十重	投網	伝馬船	手伝う	凸凹	梅雨	築山	一日	稚児	足袋	七夕	立ち退く	太刀	山車

わこうど	よせ	ゆくえ	ゆかた	やまど	やおや	やおちよう	もめん	もみじ	もめん	めがね	むすこ	みやげ	まっさお	まっか	まいご	へや	へた	ふぶき	ふつか	ふたり	ひより	ひとり	はつか	はつか
若人	寄席	行方	浴衣	大和	八百屋	八百長	最寄り	木綿	紅葉	猛者	眼鏡	息子	土産	真つ青	真つ赤	迷子	部屋	吹雪	下手	二人	日和	一人	波止場	二十日

部首一覽																								
卩	卜	十	口	匕	勹	力	刀	冂	几	冂	冂	八	入	人	一	二	丁	乙	ノ	丨	一			
巳							可		凡	冂	冂	八	入	人	一	二	丁	乙	ノ	丨	一			
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三			
中	己	工	川	山	电	戶	尤	宀	寸	宀	子	女	大	夕	夕	夕	上	土	口	口	夕	又	厶	厂
六	六	六	六	六	六	五	五	五	五	五	五	四	四	四	四	四	三	三	三	三	三	三	三	三
斤	斗	文	支	支	手	戶	戈	心	心	心	心	心	心	心	心	心	心	心	心	心	心	心	心	心
九	九	九	九	九	八	八	八	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
老	老	老	老	老	老	老	老	老	老	老	老	老	老	老	老	老	老	老	老	老	老	老	老	老
元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元
水	母	牙	穴	禾	肉	示	石	矢	矛	目	血	皮	白	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	
水	母	牙	穴	禾	肉	示	石	矢	矛	目	血	皮	白	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	疒	
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
行	血	虫	虍	虍	虍	虍	虍	虍	虍	虍	虍	虍	虍	虍	虍	虍	虍	虍	虍	虍	虍	虍	虍	
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
金	長	舛	臣	里	采	西	邑	走	辰	辛	車	身	足	走	赤	貝	豕	豕	豕	豕	豕	豕	豕	
八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八	
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	
鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	鬲	
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	
龍	齒	齊	鼻	鼻	鼠	鼯	鼯	鼯	鼯	鼯	鼯	鼯	鼯	鼯	鼯	鼯	鼯	鼯	鼯	鼯	鼯	鼯	鼯	
十六	十五	十四	十四	十四	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	十三	
元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	元	

